

俳句の会「芦火」

☆柑蘆同人誌「芦火」第725号（令和六年七月号）表紙

- ・夏の季語：「盛夏（晩夏・時候）
- ・来月号（八月号）の兼題



<盛夏>

夏の真盛り、最も暑い季節である。梅雨明けから、八月上旬まで。真夏と同じ盆地は暑く、島や高原は涼しい。

暦の上の夏ではなく、本当に暑い盛りのことである。

(子季語) 真夏／夏旺ん／真夏日

季語「盛夏（真夏）」を詠った有名俳人の句に以下のようなものがあります。

- | | |
|---------------------|-------|
| ・大空に富士澄む罌粟（けし）の真夏かな | 飯田蛇笏 |
| ・乱心のごとき真夏の蝶をみよ | 阿波野青畝 |
| ・うごけばひかる真夏の空を恐れけり | 川島彷徨子 |
| ・母の砥石ゑぐれてくぼむ真夏かな | 平畑静塔 |
| ・日時計に狂いなし夏旺んなり | 山口波津女 |
| ・追ひすがる真夏わが帽海へ飛ばす | 神山杏雨 |

☆高得点者および高得点句

*前月の清記表に記載された13名の91句のなかから互選の結果、以下の同人が高得点者となりました。併せて高得点句も掲載します。

<高得点者(敬称略)>

17点 草炎・温州

16点 穂心、14点 緑汀、11点 恵吾・勝、10点 碧玄

<高得点句(5点以上)>

・大和路は蓮華敷く野や五重塔／穂心・・・6点

<4点句(惜しい!もう少しで5点)>

・城下町巡る疎水の音涼し／碧玄

・賑わひの過ぎし公園花は葉に／温州

・ペーロンやワッセワッセの水飛沫／穂心

・軒菖蒲稽古帰りの京舞子／恵吾

・暮れ残る花十葉の白十字／草炎

・卯波立つ我が青春の和歌の浦／恵吾

・盛り上がる若葉の中に城白き／草炎

・八十路とて我は海の子南風を恋ふ／草炎

・平穏が一番だよと新茶汲む／勝

・曙のはがれゆく空つばくらめ／緑汀

・野に山に光あふれて夏来る／温州

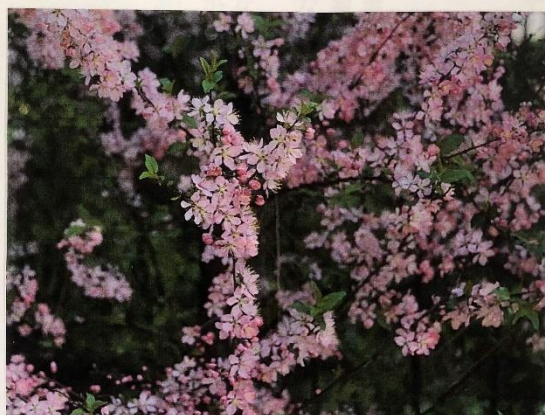
☆その他のトピックス

①「散歩道の自然～写真解説」: 安本緑汀さん

今月号は「散歩道で見かけた春の花木」を取り上げ解説されています。



散歩道の自然



安本緑汀

○右上：ヤマナシ（山梨）

- ・果樹として栽培されているナシはこのヤマナシから改良されたもの。4～5月に枝先に3cm位の白い花を沢山房状に咲かせ、秋に直径5～8cm程の黄褐色の果実をつける。果実は堅くて石細胞が多くじやりじやりして不味い。今日市販されている幸水、豊水、南水など美味しい赤梨はこのヤマナシの子孫である。なお、二十世紀梨は別のアオナシから生まれたもの。

落葉高木、本州、四国、九州に自生している。

○左上：ウンナンソケイ（雲南素馨）

- ・雲南の名がついているが中国の雲南省には自生していない。ヒマラヤ原産の常緑半つる性の低木で高さ5m以内。長く伸びた枝は垂れ下がる。春、枝先に葉に先駆けて5cm程の鮮やかな黄色の花が一個ずつ開く。

ガレージンの屋根に這わせている家を見かけた。庭木や公園樹として。

○右下：ニワウメ（庭梅）

- ・中国から古い時代に渡来した落葉低木。木の高さ2m位、4月頃葉に先駆けてまたは同時に直径1cm大の淡黄色か白色の花を多数咲かせる。果実は赤く熟し食べられる。鉢植え、庭木、切り花として。

○左下：アセビ（馬酔木）

- ・本州、四国、九州に自生している常緑低木～小高木。ヒマラヤや東アジアにも分布がある。やや乾燥した山地に生え9mに達するものもある。万葉集にも歌われているので古くから愛好されていたようだ。春に白い花が多数垂れ下がって咲く。花はつぼ型で先端は浅く五裂する。有毒植物で牛馬がこれを食べると中毒症状を起こすところからこの漢字があてられた。万葉時代にはアシビと呼ばれた。庭木、盆栽、生垣に利用されるが近年桃色の品種が登場して人気を博している。

②姫路エッセイストクラブ「水脈」26号のエッセイより抜粋：北草炎さん

- ・「岬」に纏わるエッセイですが、抜粋とは言え2ページにわたって記述されていますのでポイントのみ記載します。

「ラジオから流れて来る歌に、ふと心が動いた。『岬巡り』である。ずいぶん前に流行った歌だ。あの頃私たち夫婦は、「我々も随分『岬巡り』やったね」とにやにやしたものだ。」からエッセイは始まります。

そして、草炎さんのお生まれになった和歌山市に縁のある地名、水軒浜の防潮林、雑賀崎の村を始め本州最南端の潮岬に纏わるお話が展開されています。そしてご家族で行った四国一周の旅で室戸岬へ。高知では桂浜での遊泳、高知城見学、皿鉢料理を堪能、そして足摺岬へと。

中段では、お嬢様の婚約者のご両親にねぶた祭りにご招待され東北に行かれたと。そしてねぶた祭りの前日、本州最北端の大間岬に案内されたとのこと。生憎の曇天で辺りが良く見えなかったが、真夏にもかかわらずひんやりした空気、海鳥の鳴き声、停泊中の船の帆柱のきしむ音は、北の国の旅情を感じるには十分であったとのこと。

そして後段では、「夫の三十年勤務祝いに職員互助会から旅行券をもらった時、二人の希望は『犬吠岬へ行きたい』で一致した。岬の燈台から太平洋を見渡して、『なるほど、地球は丸いなあ』と二人で実感し感動した。そして同じ思いに、顔見合わせで笑ってしまった。海外旅行での『岬の思い出』は、意外に少ない。あげるとすれば、南米最南端のホーン岬と、欧州北端のノールカップだろうか。ともに、『ここまで来た』という思い入れの方が強く、岬としての感銘は薄いのもおかしいことだ。」で結ばれています。

③近況報告&炉辺談話

○後藤碧玄様

- ・六月三日に、八十代最後の誕生日を迎えられたと。

三木市のご友人と「お互いによく生きたものだ」と電話でお話をされたそうです。芦火の原稿は必ずご実家から500mくらい離れた郵便局に徒歩で投函することになっているとのことですが、この距離が以前よりも遠く感じるようになったとのこと。

「吾れ生きる証の椽青葉かな 碧玄」

○河本要様

- ・近くに万博記念公園があり、広大な敷地に種々の花が咲いています。春は梅、椿、桜、夏は薔薇と紫陽花、秋はコスモスと紅葉。独りで、または障がい者仲間とよく訪れます。

NHK短歌テキストに掲載されました。

お茶を汲み机の隅のそっと置く

みつめていれば飲みてくれたり

大宰府天満宮奉納俳句大会 入選しました。

新任の上司同郷山笑ふ

○北草炎様

- ・相も変わらず内科と整形外科通い、眼科、歯科、皮膚科の定期健診、週一回のデイサービス、二か月に一回の労音公演とバタバタしております。

先月末の労音、南こうせつの「神田川」公演素敵でした。娘と一緒に大いに楽しみました。来月は「カルメン、ハイライト」です。

娘との二人暮らしも慣れてきました。デイサービスの仲間たちからは、羨ましがられています。

<俳句の会「芦火」概要>

- ・会員は柑芦会会員
 - ・現在の会員は大学3期卒から25期卒の13名
 - ・昭和38年（1963年）結成・・・約60年の歴史
 - ・会員の作句は通信俳句誌「柑蘆同人誌・芦火」に掲載され毎月各人に配付
 - ・創刊以降毎月発刊。令和4年（2022年）6月に第700号発刊。
 - ・50号ごとに句誌を発刊。令和4年5月に「芦火第14号句集」発刊
 - ・創刊時からの延べ会員数、72名（高商32名、高商教授1名、大学39名）
- <編集者・コンタクト先および会費>
- ・編集者：穂永 千秋（大学17期）（俳号：穂心）
メルアド：suishin2010@dream.ocn.ne.jp／携帯：090-9887-2513
 - ・その他のコンタクト先：
 - ・山下 勝（大学14期・前編集者）（俳号：勝）
メルアド：yama723@nifty.com／携帯：090-1349-6727
 - ・平林 義康（大学20期）（俳号：温州）
メルアド：hirabayashi9497@yahoo.co.jp／携帯：090-8525-7293
 - ・会費：年会費1万2千円

以上
(文責：平林 温州)